

ことばの理解と身体感覚

大 谷 真 弓

Comprehension of words and body sensation

OHTANI Mayumi

(1) 問 題

I. 日常および臨床場面での言葉

多くの人が普段の生活で言葉話をしているにもかかわらず、ほとんどの場合、言葉を話していること自体を意識していない。しかし、人が緻密に思考し、他者に自らの考えを伝達する上で、言葉はかなり重要な位置を占めている。また言葉とは、人がある対象を認識すると同時に人をこの世に住まわせ人たらしめる、生成の時に立ち会うものであり、人は身分けられつつ言分けられ、言分けられつつ身分けられる(丸山, 1993)。そして、人は言葉によってその社会に「生かされ」、無自覚なまま言葉—母国語—によって世界を「切り取り」(Merleau-Ponty, 1945: 竹内・小此木, 1967)認識している。さらに、我々は言葉によって始めて嘘をつくことができる。言葉は、指示作用を離れて全く純粋に言葉であることも可能であり、その意味では人間のみが踏み込んだ領域に在る。

臨床心理面接で、クライアントは自らの苦しみや不安などを語り、セラピスト—クライアントの間では、言葉、しぐさ、表情、ノンバーバルなメッセージなどが表出され受け取られる。そこで語られる「言葉」は、面接のために特にしつらえた道具ではなく、日常的にも使用されているもので、程度の差こそあれ誰もが扱えるものである。言葉とはこのように、誰もが話すものではあるが、言いたいことを言葉によって十分に表現できたと思えるほど言語表現に長けた人がいる一方で、言語化不可能なものを抱え苦しむ人々も多い。そこでクライアントによっては、箱庭を作成したり絵を描いたり、イメージ技法が導入されることもあるのだが、このような媒介物が使用される時でさえも、言葉が交わされることは多い。

以上のように、言葉は日常生活や心理面接の場で通常使用されるものであるという点や、人間が世界を認識する原点において欠かせないものであり、人間が「在る」ことに根本的な意味を与えているとともに人間のみが目覚めた領域であるという点で重要であり、人間の原点であるといえる。このような原点としての言葉に注目したい。

II. 象 徴 化

象徴の重要な機能は、別々のものに橋を架けてつなぐことであり、象徴は多義性を孕んでいる。

臨床場面で治療者が立ち会うことが多いのは、遊びに浸ったり箱庭を作成すること、絵を描いたり思いを言葉にすること、イメージを体験することなどであり、これらは全て象徴でありうる。象徴は分裂を癒すものであるため、治療上大きな位置を占める。人が自らの思いや感じ等を「言葉にすること」はこのような象徴化の一つであり、これまでにその重要性について様々な実証研究がなされている。例えば大石（1990）は、フォーカシングの体験過程において、クライアントが自分の感じを言葉にしていくことの治療的意義について報告し、心理療法の枠組みの中で「感じを言葉にすること」の意義と危険性について考察している。また、心身症のクライアントが身体症状や身体感覚を言語化することによって、治療経過が促進され、さらに自己の内面を言葉で探り表現するようになったという事例（原田，1994）や、身体感覚に違和感のないものとして感じられる言葉である「本音」の探索が、体験過程を促進するという報告（有村・亀口，1990）がみられる。

このように、体験や感覚を言葉へと象徴化させることが重要であることが示されているが、それでは、臨床場面で交わされる「言葉」から「感じ」が引き起こされるという逆のプロセスでは何が起きているのだろうか。セラピストクライアント間では言葉がやりとりされているが、そこではどのような場合に「感じ」が賦活され、どのような「感じ」が引き起こされやすいのだろうか。人によって、また場合によって、使用している言葉は同じであっても、それらの「言葉」から喚起される「感じ」には違いがあるだろう。本論では、これらのことをふまえつつ、「言葉」から「感じ」を呼び起こす過程について調査し、分析・考察したい。

Ⅲ. 身体感覚

「言葉」から「感じ」が引き起こされるというプロセスで起こってくる身体感覚には、「言葉に対応して身体内部に喚起される感覚」と、「今、自分がその感覚を感じている」という、メタ認知的な感覚があると考えられる。「今、自分がその感覚を感じている」というメタ認知は、池見（1995）のいう「心の実感」に「触れている」という感じであり、「人間の身体にとって、いや人間存在にとって」非常に大切で、「心理療法全般にとってきわめて重要」である。

本論の特徴は、「ある言葉」から身体内部に「それに対応した感覚」を喚起させるプロセスを対象とする点である。このように「言葉」から「感覚」を賦活させるわけであるから、人間にとって基本的な聴覚、視覚等の「身体感覚に関する言葉」を調査では使用した。また、言葉に対応して身体内部に喚起される感覚の「感じ方の相違」は、モダリティーの相違する言葉同士を組み合わせた語、つまり共感覚的 synesthetic な表現を使用することにより測定することとした。楠見（1988）は、共感覚の「理解度」という用語を用いて研究をすすめている。感覚のモダリティーの異なる言葉を組み合わせた時、その「理解度」はどのような場合に大きくどのような場合に小さいかが調査・分析されている。その際には、言葉から感覚を「呼び起こす」とこと、（少なくとも）「言葉上理解する」とことは区別されていないが、本論では、共感覚的表現を「体感」とすることと「理解」することを区別して考えたい。

象徴化とは一見逆のようにも思える、「言葉」から「感じ」が引き起こされるプロセスが対象とされるのは、「言葉」は実感の後に生じ、表現される（池見，1995）だけでなく、言葉は人が世界に出会える縁であることから、「言葉」により刺激されたことで生じる「感じ」の違いは、その人

がこの世に在る上で、実は大きな事だと考えるためである。臨床場面でも言葉が頻繁に使用されており、それらの「言葉」から「感じ」を引き出しやすい人と、「感じ」の希薄な「言葉」上のコミュニケーションに終始する人とは、展開が異なるであろう。

(2) 目 的

言葉を受けとる時に人が感じていることについて、言葉を「理解」することと、言葉から喚起された身体感覚を「体感」すること、およびそれらに対するメタ認知という視点から検証する。

(3) 方 法

I. 質問紙の作成

視覚、聴覚等の身体感覚を感じる程度を測定する質問紙でこれまでに作成されたものには、列挙された「感覚に関する言葉」に対して、被検者自身が主観的にどれくらい鮮明に感じるかを評定するものがある。Betta, G. H. (1909) の考案した QMI (Questionnaire upon Mental Imagery) に始まる、視覚、聴覚、皮膚感覚、運動感覚、嗅覚、嗅覚および有機感覚等の様相に関する言語刺激が喚起する表象の鮮明度を、被検者に評定させるものや、Sheehan, P. W. (1967) らによるその簡易版等である。また、共感覚に関しては、五感を網羅する感覚形容詞と名詞を組み合わせた共感覚的表現の理解過程についての研究(楠見, 1988) がみられる。楠見は、共感覚に対する「理解度」という視点から論を展開している。本論では、これらの研究および感覚表現辞典(中村, 1995)を参考にして、(1) 感覚様相の異なる言葉を組み合わせたもの i) 結びつけやすい言葉の組み合わせられた共感覚的表現 8 項目(例: 甘い音) ii) 結びつけにくい言葉の組み合わせられた共感覚的表現 6 項目(例: 暗い味) (2) 同一感覚様相の言葉が組み合わせられた表現 5 項目(例: やかましい音) の三種類、計 19 項目から成る質問紙を作成した¹⁾。本論は、言葉から賦活された身体感覚を対象としており、その身体感覚の程度を測定することが目的である。よって、提示された言語表現を五感で感じてもらって、「頭で理解できるかどうか」ではなく「体でありありと感じられるかどうか」について、「非常にありありと感じられる」から「全く感じられない」までの 5 段階で評定するよう教示した。また、その評定後に、自分の感覚に対するメタ認知に関する質問を 4 項目設置した。自分の身体感覚を評定した時の感じについての質問、Q1「自分の感覚は信頼できると思う」、Q2「自分の感覚がよく分からなかった」、Q3「体と頭の区別がよく分からなかった」、Q4「体にはぴったりしないが頭では理解できることが多かった」、という 4 項目に対して、「はい」または「いいえ」の二件法で回答を求めた。

II. 調査の実施

【被検者】大学生 337 名より回答を得た。このうち分析に用いたデータは計 317 名(男子 144 名, 女子 173 名)である。被検者全体の平均年齢は 20.74 歳(男子 20.05 歳, 女子 21.30 歳), SD は 1.70(男子 1.65, 女子 1.52)。

(4) 結 果

I. テストの得点化

「非常にありありと感じられる」から「全く感じられない」に各5～1点を与えて得点化した後、因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行なった。固有値ならびに解釈可能性を検討した上で、因子を三因子に指定した。因子負荷量が.35以上の項目を選択し、それらの単純合計を各下位尺度得点とした。項目内容を検討した結果、下位尺度をそれぞれ第一因子から、①「同感覚様相」尺度(7項目)②「遠共感覚」尺度(5項目)③「近共感覚」尺度(4項目)と命名した²⁾。項目内容は、①「あざやかな色」「なまぐさい味」「なめらかな感触」「あまいにおい」「やかましい音」「しおからい味」「なまぐさいにおい」②「暗い色」「明るいにおい」「黄色い感触」「静かなにおい」「うるさい感触」③「かたい音」「刺すような味」「あまい音」「やわらかい味」である。各々の α 係数は、同感覚様相尺度 .80、遠共感覚様相尺度 .69、近共感覚様相尺度 .57 となった。各尺度の得点の単純合計を各尺度得点とする。(以降、各尺度得点をそれぞれ、同 M 得点、遠 S 得点、近 S 得点と記す。)

II. 分 析 1

自分の感覚に対する信頼・分かりやすさ、および言葉を「頭で理解」することと「体感」することの区別とその違いが、それぞれ「言葉から同 M 感覚・遠 S 感覚・近 S 感覚を喚起させる」とこと、どう関わるかを調べる。Q1～Q4の回答は「はい」「いいえ」の二項目である。それぞれの同 M 得点・遠 S 得点・近 S 得点について、回答(2)×性(2)の二要因の分散分析を行なった(図1～図4)。

(i) 自分の感覚に対する信頼、分かりやすさの違いについて

分析の結果、「自分の感覚が信頼」できる人は信頼できない人よりも、同 M 得点・遠 S 得点・近 S 得点ともに有意に高かった(それぞれ $F_{(1,314)} = 6.54, p > .05$, $F_{(1,314)} = 4.34, p > .05$, $F_{(1,314)} = 9.77, p > .01$)。「自分の感覚が分かった」人とよく分からなかったとでは、遠 S 得点に有意差はみられず、同 M 得点・近 S 得点とともに、「自分の感覚が分かった」人の方が .01% で有意に高かった(それぞれ $F_{(1,314)} = 25.00$, $F_{(1,314)} = 27.90$)。以上の結果からまず、自分の感覚が信頼できる人は、同 M 感覚、遠 S 感覚、近 S 感覚全てを呼び起こしやすいことが示された。また、自分の感覚が分かったという人は、同 M 感覚、近 S 感覚を喚起しやすかったが、遠 S 感覚の喚起には、自分の感覚が分かったかどうかは影響を及ぼさないことが分かった。

(ii) 「頭で理解」することと「体感」することの区別について

「体と頭の区別」がよく分からなかった人と分かった人とでは、遠 S 得点に有意差はみられず、同 M 感覚・近 S 得点については「体と頭の区別」が分かった人の方が有意に高かった(それぞれ $F_{(1,314)} = 3.67, p > .01$, $F_{(1,314)} = 12.76, p > .001$)。また、「体にはぴたりしないが頭では理解できることが多かった」人とそうでない人とでは、遠 S 得点・近 S 得点ともに差はみられず、同 M 得点のみ「頭で理解」できた人よりも「体感」できた人の方が1%で有意に高いという結果であった($F_{(1,314)} = 8.82$)。

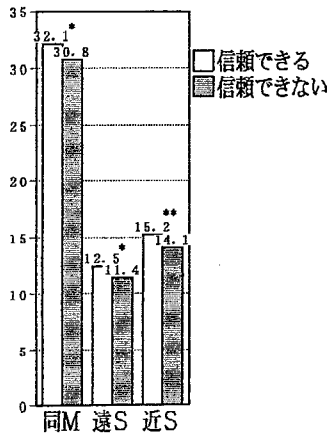


図 1 自分の感覚は信頼できると思う

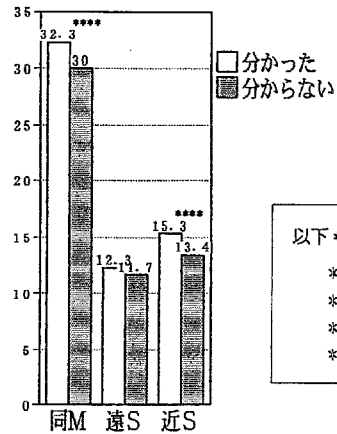


図 2 自分の感覚が分かった

以下 * 印は下記の通り

*	5	%
**	1	%
***	0.1	%
****	0.01	%

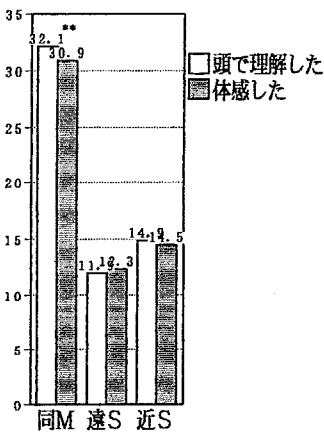


図 3 頭で理解したか体感したか

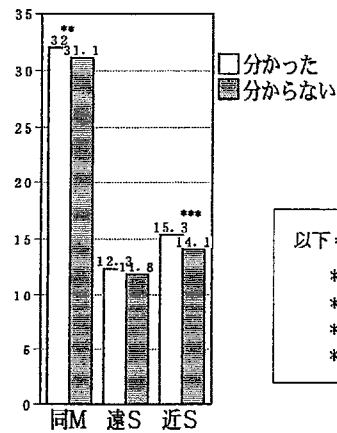


図 4 頭と体の区別

以下 * 印は下記の通り

*	5	%
**	1	%
***	0.1	%
****	0.01	%

これらの結果から、遠 S 感覚を喚起するにあたって、「体と頭の区別」ができた人とできなかった人との間でも、「体感」した人と「頭で理解」した人との間でも差が無いことが示され、また、近 S 感覚に関しては、「体と頭」を区別できることが必要であるが、区別がついていれば「体感」する場合と「頭で理解」する場合で差はないことが示唆された。同 M 感覚は、「体と頭の区別」ができ、「体感」できる人の方が、「頭で理解」できる人よりも喚起されやすいことが示された。

Ⅲ. 分 析 2

言葉を「頭で理解」することと「体感」することと、自分の感覚が「信頼できる」ことおよび「分かる」ことが、「言葉から同 M 感覚・遠 S 感覚・近 S 感覚を喚起させる」上でどのように関

わっているのか調べる。頭で理解することと体感することについての質問(Q1・Q2)と、自分の感覚に対する信頼および分かりやすさに関する質問(Q3・Q4)を組み合わせ³⁾、 2×2 のセルを作成し、4グループそれぞれの同M得点・遠S得点・近S得点について、グループ(2)×性(2)の分散分析を行なった⁴⁾。

(i) 同様相感覚尺度得点(同M得点)について

◆自分の感覚が信頼できる場合、または分かった場合

分析の結果、「自分の感覚が信頼」できる場合や、「自分の感覚が分かった」場合には、「体と頭の区別」が分かった人と分からなかった人とでは、同M得点に有意差はみられなかった(図5・図6)。同じく、「自分の感覚が信頼できる」場合や、「自分の感覚が分かった」場合には、言葉を「体感」できた人と「頭で理解」できた人とで、同M得点に有意差はみられなかった。つまり、自分の感覚が信頼できる場合や分かった場合には、「体感」できても「頭で理解」できても、その鮮明度に差はないことが示された。

◆自分の感覚が信頼できない場合、またはよく分からなかった場合

「自分の感覚が信頼」できない場合やよく分からなかった場合は、「体と頭の区別」が分かった人と分からなかった人とでは、差がみられなかったのに対し、「体感」できた人は「頭では理解」できた人よりも同M得点が有意に高いという結果であった(それぞれ $F_{(1,131)} = 6.41, p > .05$, $F_{(1,103)} = 6.69, p > .01$)(図7・図8)。つまり、自分の感覚が信頼できなかつたりよく分からなかった場合に、「頭で理解」した人は同M感覚を鮮明に喚起しにくいことが分かった。

以上の結果から、自分の感覚が信頼できていたり分かっていれば、頭と体は区別できてもできなくても同M感覚は喚起されやすく、自分の感覚が信頼できなかつたりよく分からなかった場合に同M感覚を喚起しやすかったのは、頭で理解した人よりも体感できた人であることが示唆された。

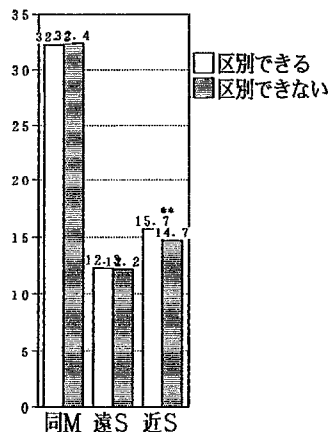


図5 自分の感覚が分かった場合

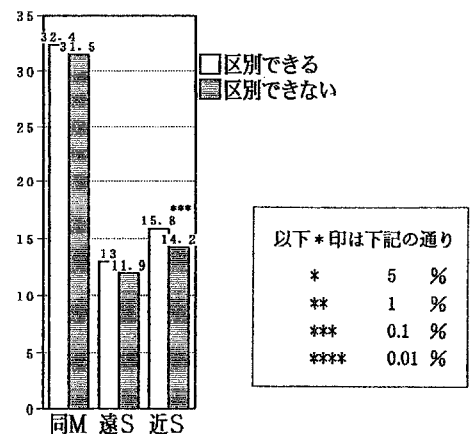


図6 自分の感覚が信頼できる場合

(ii) 近共感覚尺度得点 (近 S 得点) について

◆自分の感覚が信頼できる場合、または分かった場合

分析の結果、「自分の感覚が信頼できる」場合、「体と頭の区別」が分かった人と分からなかった人とは、回答の主効果 ($F_{(1,183)} = 11.88$) が 0.1% で有意であった (図 6)。つまり「体と頭の区別」が分かった人の方が、分からなかった人よりも近 S 感覚を感じやすいという結果であり、自分の感覚が信頼できる場合でも、頭と体の区別ができることが近 S 感覚を感じるためには重要であることが示された。さらに、「体と頭の区別」が分かった場合には、「体にはぴったりしないが頭では理解できることが多かった」人とそうでない人とは、回答の主効果 ($F_{(1,164)} = 4.79$) が 5% で有意であった (図 9)。これは、区別が分かった場合には、頭で理解するよりも体感する方が、より近 S 感覚を感じやすかったことを示している。

また、「自分の感覚が分かった」場合には、「体と頭の区別」がよく分からなかった人よりも分かった人の方が、近 S 感覚を感じやすかった ($F_{(1,211)} = 6.93$, $p > .01$)。その一方で、「自分の感覚が信頼できる」場合や「自分の感覚が分かった」場合には、「体にはぴったりしないが頭では理解できることが多かった」人とそうでない人とは差がないという結果であった。

◆自分の感覚が信頼できない場合、またはよく分からなかった場合

「自分の感覚が信頼」できなかった場合または「自分の感覚がよく分からなかった」場合は、「体と頭の区別」や「体にはぴったり」することと「頭で理解」できることの違いは、近 S 得点に影響しないという結果であった。

以上の結果からまず、「自分の感覚が信頼」できなかった場合や「よく分からなかった」場合は、「体と頭が区別」できる人とできない人とは、近 S 感覚は同程度に喚起されやすいことが示された。次に、「自分の感覚が信頼」できる場合や「分かった」場合には、「体と頭の区別」がよく分からなかった人は、近 S 感覚を喚起しにくいにもかかわらず、「体にはぴったりしないが頭では理解できることが多かった」人はそうでない人との間で、賦活された近 S 感覚の鮮明度に差がみられなかったことが分かる。つまり自分の感覚が分かる場合や信頼できる場合、「頭で理解でき

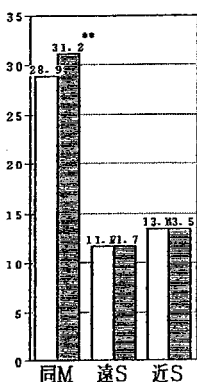


図 7 自分の感覚が信頼できる場合

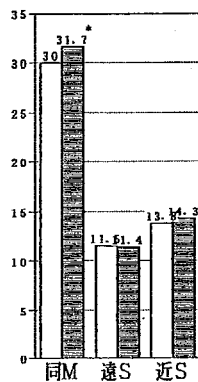


図 8 自分の感覚が信頼できない場合

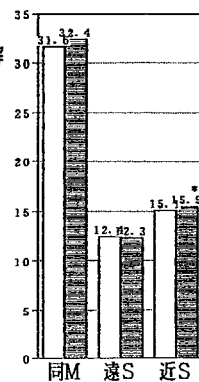


図 9 頭と体の区別が分かった場合

以下 *印は下記の通り

*	5 %
**	1 %
***	0.1 %
****	0.01 %

る」人は、「体感」できる人と同じ程度に近 S 感覚を喚起させやすいが、「体と頭の区別」がつかない人は近 S 感覚を喚起させにくいといえる。このことから、「体にはぴったりしないが頭では理解できる」という形であっても、頭で理解する事と体感することが「区別できる」ことが重要であり、逆にいうと「体感」することと「頭で理解できる」ことが区別できないと、近 S 感覚を喚起させにくいことが分かった。

また、このことと、「体と頭の区別」ができた場合には、「頭で理解」するよりも「体感」する方がより近 S 感覚を呼び起こしやすかったという結果を合わせると、「体と頭が区別」できた場合には、体感できる方が近 S 感覚を喚起させやすいことが示唆される。

以上の分析より、「自分の感覚」が信頼できなかった場合や分からなかった場合には、近 S 感覚を喚起させにくいこと、また「自分の感覚が信頼」できる場合や「分かった」場合には、「体と頭が区別」できることが必要であり、さらに、頭と体が区別できた上で、「体感」できる人の方が、「頭で理解」できる人よりも近 S 感覚を鮮明に賦活させやすいことが示された。

(iii) 遠共感覚尺度得点（遠 S 得点）について（結果はいずれも回答の主効果）

◆自分の感覚が信頼できる場合、または分かった場合

「自分の感覚が信頼」できる場合または「分かった」場合には、「体と頭の区別」が分かった人と分からなかった人との間、および「体にはぴったりしないが頭では理解できる」人とそうでない人との間で、遠 S 得点に有意差はなかった。

◆自分の感覚が信頼できない場合、またはよく分からなかった場合

「自分の感覚が信頼」できない場合は、「体と頭の区別が分かった」人と分からなかった人との間に差はみられなかった。また、同じく「自分の感覚が信頼」できない場合には、「体にはぴったりしないが頭では理解できる」人でもそうでない人でも遠 S 感覚を同程度に感じていることが示された（図 8）。

これらの結果は、自分の感覚が信頼できなければ、体と頭の区別が分かっても分からなくても遠 S 感覚は同程度の鮮明さに喚起され、その逆に自分の感覚が信頼できるならば、体と頭の区別が分かっても分からなくても、遠 S 感覚は同程度に呼び起こされることを示している。この結果から、遠 S 感覚の喚起のされ方は、近 S 感覚の喚起のされ方とは異なることが推測される。

◆体感することと頭で理解することの違い

次に、「体と頭の区別」が分かった場合の結果についてであるが、「自分の感覚が信頼」できる人は信頼できない人よりも遠 S 感覚を感じやすいということが示された ($F_{(1,160)} = 6.46, p > .05$)（図 10）。また、「体にはぴったりしないが頭では理解できる」場合にも同じく、「自分の感覚が信頼」できる人は信頼できない人よりも遠 S 感覚を感じやすいということが示された ($F_{(1,150)} = 4.24, p > .05$)（図 11）。この二つの結果から、体と頭の区別が分かったならば、「体感」できる場合のみでなく、体にはぴったりしなくても「頭では感じられる」という形であっても「頭・体」の区別がついていれば、「自分の感覚が信頼」できる時、遠 S 感覚を賦活させやすいことが示唆された。このことを支持するものとして、「体と頭の区別」がよく分からなかった場合には、「自分の感覚が信頼」できる人とできない人とで遠 S 得点に差がないという結果もみられた。

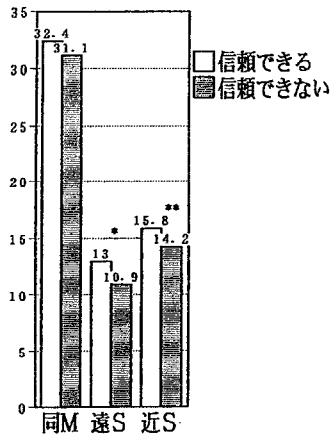


図 10 頭と体が区別できた場合

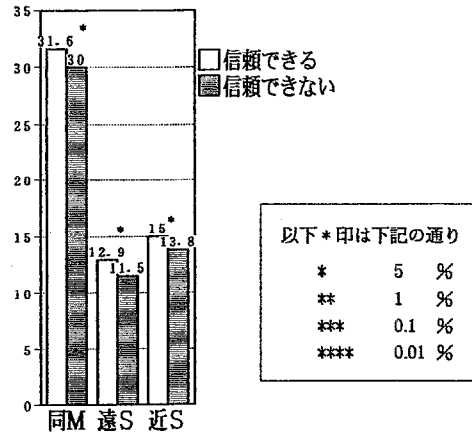


図 11 頭では理解できた場合

以下 * 印は下記の通り

*	5 %
**	1 %
***	0.1 %
****	0.01 %

以上の結果から考えると、自分の感覚を信頼できない場合には遠 S 感覚を喚起させにくく、「体と頭」の区別がついていれば「体感」した場合であっても「頭で理解」した場合であっても、「自分の感覚が信頼」できれば遠 S 感覚を呼び起こしやすいことが推測される。つまり、遠 S 感覚を喚起させるには、「頭で理解」できることと「体感」することの区別がつき、その上で「自分の感覚が信頼」できることが必要であることが推測される。またその際、「体感」する場合と「頭で理解」する場合とでは、遠 S 感覚の賦活のされ方に差はないといえる。

(iv) まとめ

分析 2 の結果を以下にまとめる。「自分の感覚が信頼」できない場合には、「体感」することと「頭で理解」することの区別がついてもつかなくても、近 S 感覚・遠 S 感覚ともに喚起されにくいことが示された。ところが、同 M 感覚に関しては、「自分の感覚が信頼」できない場合には、「体感」する方が「頭で理解」するよりも喚起しやすいという結果であった。「自分の感覚が信頼」できる場合に、近 S 感覚・遠 S 感覚を賦活させるには、まず、「体感」することと「頭で理解」することが区別されることが必要であること、同 M 感覚を呼び起こすにはその区別は必要ではないことが示唆された。

次に、近 S 感覚と遠 S 感覚とで結果が異なった部分についてであるが、近 S 感覚を喚起させる場合には、「体感」する方が「頭で理解」するよりも鮮明であり、遠 S 感覚を喚起させる場合には、「体感」する場合と「頭で理解」する場合とで鮮明度に差はみられなかった。つまり、近 S 感覚の場合には、「体感」することと「頭で理解」することとの区別ができた上で、さらに体感した方が頭で理解するよりも喚起しやすいが、遠 S 感覚の場合には、「体感」することと「頭で理解」することとの区別ができることは必要だが、体感した場合と頭で理解した場合とで喚起のされ方に差はみられないということであった。

(5) 考 察

以下、3つの点について順に考察する。

(a) 自分の感覚が「信頼できる」ことと「分かること」について

自分の感覚が「信頼できる」人は、同様相感覚・近共感覚・遠共感覚ともに喚起しやすく、自分の感覚が「分かった」人は、同様相感覚・近共感覚は喚起しやすかったが、遠共感覚については自分の感覚が「よく分からなかった」人と同程度にしか喚起されていなかった。つまり、自分の感覚が「信頼できる」人は、遠共感覚を鮮明に喚起しやすく、自分の感覚が「分かる」かどうかは、遠共感覚の喚起に影響しないという結果であった。これは何を意味するのだろうか。

遠共感覚的な表現とは、「黄色い感触」「しずかなにおい」等のような、(楠見の研究によれば)結びつけにくい異モダリティーに属する言葉の組み合わせされたものである。詩的な表現とでもいえるような言葉である。

尼ヶ崎(1990)は、「言葉を受け取る」時の言葉と身体に関わりに言及しており、それを筆者なりにまとめると以下ようになる。言葉の受け取り方には三つの異なる層があり、それは、①自分の身体感覚を言葉にして、言葉を自ら差し出す場合、②向こう側の言葉が自分の体に入ってくる場合、③こちらから向こうへ出ていって、言葉をひとつひとつたどってゆく場合、に分けられる。①は、フォーカシングの過程で起こるような「受肉した言葉」が自分から湧き出る、喜びを伴った体験であり、②は、日常的な言葉を書いたり読んだりする体験、③は、書類などの「意味を受肉していない言葉」を、記号として操作するような体験のことである。①から③に向かうほど、身体感覚から遠ざかり、言葉を制度化された記号として操作する態勢が必要となるという。

ここで、本論の結果に立ち戻ると、遠共感覚的表現は、分かりにくく「こちらから出て」いって触れなければならない言葉である。しかし、身体感覚に関する言葉が組み合わせられた表現であるため、③のような無味乾燥な記号ではなく、受肉した言葉になりうる可能性を持っている。自分の感覚が「信頼できる」人が、このような性質をもった遠共感覚を喚起しやすかったということは、彼らが、遠共感覚的表現を受肉した言葉にまで高めることができたことを意味する。すなわち、「自分から言葉に向かってゆき」、詩的表現をも身体に響かせられたことになる。遠共感覚的表現が受肉するとは、異モダリティーにあって(結びつけにくいという意味で)分裂の深い言葉同士を統合したことを意味する。このような結果がみられた一方で、自分の感覚が「分かる」かどうかは、自分の感覚が「信頼できる」かどうかとは異なって、遠共感覚的表現の喚起には影響しないという結果もみられた。つまり、自分の感覚が「分かる」ことは、異モダリティーにあって分裂の深い言葉同士の溝を埋める要因とはならなかったのである。自分の感覚が「分かる」ことは分裂を統合する機能とはならないのだ。

以上のことから考えると、自分の感覚が「信頼できる」とは、木村(1988)のいう「あいだ」にある本能的な感覚であり、「相互に離れたところにある異なった諸事物をひとつに結合する能力」、つまり「共通感覚」なのではないだろうか。そして、自分の感覚が「分かる」とは、共通感覚レベルというよりも「五感」のレベルの感覚に対するメタ認知のことではないだろうか。

(b) 自分の感覚が「信頼できる」ことと、「体感」することとの関連について
同様相感覚と近共感覚の喚起のされ方に違いがみられた。

同様相感覚は、自分の感覚が「信頼できない」場合に、「頭で理解」した人よりも「体感」できた人の方が喚起されやすく、近共感覚は、自分の感覚が「信頼できる」場合に、「頭で理解」した人よりも「体感」できた人の方が喚起されやすいという結果であった。

同様相感覚は、モダリティーの同じ言葉が組み合わせられた「あざやかな色」「やかましい音」等の表現であり、五感のうちの一つの身体感覚を表現したものである。自分の感覚が「信頼できない」場合に、「頭で理解」するより「体感」した方が同様相感覚を喚起しやすいとは、自己への信頼感が無い時でも、体の感覚に降下できた時、五感のうちの一つの感覚—視覚・聴覚など—を感じられることを意味する。他方の、近共感覚とは、モダリティーの異なる言葉が組み合わせられた「甘い音」「やわらかい味」等の表現である。自分の感覚が「信頼できる」場合に、「頭で理解」するよりも「体感」した方がこのような近共感覚を喚起しやすいとは、自分の感覚への信頼感があり、体の感覚に降下できた時には、五感のうちの二つの感覚を統合させて感じられることを意味する。だとすると、人は、体の感覚へと触れにゆくことができて、自分の感覚への信頼感が持てない場合には、一つの感覚を感じるだけであり、逆に自分の感覚への信頼感が持てる場合には、五感のうちの二つの感覚を統合させて感じられることになる。このことから考えると、自分の感覚への信頼感とは、異モダリティーにある二つの感覚を統合するための重要なファクターであると推測できる。

異モダリティーにある感覚を統合するとは、分裂の間を埋めることであり、自分の感覚への信頼感とは、(a) でみてきたように、やはり木村のいう「あいだ」に関わるものではないだろうか。そして、自分の感覚への信頼感が持てなくても、「体感」することによって五感のうちの一つの身体感覚が喚起できるのは、一つの身体感覚を喚起するには「あいだ」を埋めなくてもよいからではないだろうか。

(c) 「体感」と「頭で理解」することを区別できることとは

「自分の感覚が信頼」できる場合、同様相感覚を喚起するには「体と頭を区別」する必要はないが、近共感覚・遠共感覚に関しては、「体と頭の区別」ができる方が喚起しやすいという結果であった。これは、五感のうちの一つを喚起する時には「体と頭を区別」する必要がなく、異モダリティーに属する二つの感覚を統合して喚起する時には、「体と頭を区別」できる方が呼び起こしやすいことを意味する。このことから、異モダリティーに属する二つの感覚を統合して喚起するには、「体と頭」が区別できることが大切なことが分かる。

「頭で理解」するとは、体感が抑圧され、言葉が「体感」と切り離された状態で知的に受けとめられることである。「体感」するとは、言葉から体に降下して身体感覚へとつながることである。そして体と頭が「区別できる」とは、言葉が体から切り離された上で、体と切り離された言葉から、体の方に今一度立ち戻ることを自覚的、能動的に行なえるということである。逆にいえば、体と頭が「区別できない」ということは、言葉が体から切り離されているという感じが曖昧で、自覚的・能動的に言葉から体へと降下できないことだと考えられる。

近共感覚的表現・遠共感覚的表現とは、「やわらかい一味」「黄色い一感触」のような、言葉

と言葉の間に五感の溝、落差がある表現である。落差のある言葉が重ねられた表現は、「体と頭」が区別できる場合に喚起されやすい。他方、「やかましいー音」のような、落差のない言葉が重ねられた同様相感覚的表現は、頭と体が区別されてもされなくても、喚起のされ方に差はみられない。つまり、落差のある言葉どうしは、体から切り離された上で、「能動的に」体を感じることで統合されやすく、落差のない言葉どうしは、能動的に触れにゆかなくとも感じるすることができる。

(a) で述べた尼ヶ崎の分類に沿って考えれば、言葉の間に落差のある表現は③「こちらから向こうへ出て行って、言葉をひとつひとつたどってゆく」必要があり、落差のない表現は、②「向こう側の言葉が自分の体に入ってくる」ことで十分喚起されることになる。言葉の間の落差を埋めるには、意図的・能動的に体の感じに降下し触れることが必要であるようだ。本調査では、言葉から身体感覚を「意図的に」感じてもらったため、このような結果が表れた。しかし、通常、言葉を理解する過程では、ここで対象とされている「言葉から体に降下する」というプロセスはそれほど意識されず、報告されにくいだろう。よって、あまり観察の対象とはならないが、人が言葉を受け取る時の潜在的過程には、このような事象が起こっているのではないか。言葉とは本来「差異」の表現（言葉と言葉の間には差異がある）である。言葉が一旦体から引き離されることで、言葉と言葉の「差異」が埋めやすくなり、言葉で表現されるものがより「身近か」に感じられるのではないか。体で感じることで頭で理解することが区別できることは、「意図的・能動的に体の感じに降下し触れる」ことにつながり、言葉による表現をより「身についた」ものとするために、重要であると推測できる。

（6）今後に向けて

本論では、自分の感覚が信頼できることは、言葉を受け取る上で共通感覚的な働きを担っていること、そして、頭で理解することと体感することが区別できることは、意図的・能動的に体の感じに触れて行って、言葉の間の差異を埋めるために重要であることが推測された。言葉と身体感覚について調査するにあたっては、それらの性質上付随する困難があり、それらを捨象することは難しく、その努力は今後も必要である。言葉を受け取る時に起こっていることには意識外の事象も多く含まれ、自己報告で掘り取れる部分は一部である。また、自己報告されたものが意味するもの、他者との比較が意味するものについてもさらに検討する必要があるだろう。

今回は自己報告された部分を分析したため、その限界もあったが、自分で自分の感覚が「信頼できる」と言えることは、あるレベルでは意味あることだろう。「自分の感覚は信頼できる」と自分で報告できることは、共通感覚とでもいうような、本能的な感覚を信頼していることを意味すると思われる。その感覚が揺れ出した時こそ、自己の存在がゆらいだ時であり、その時がまさに、臨床場面にクライアントが現れる時なのかもしれない。面接場面で話されることや、人が意識的に把握している事柄について考えると、自己報告にどれだけの意味があるかは難しい問題である。しかし、言葉にできることをまず研究対象にすることから道が開け、そこからどれだけ感覚に近づけるかが大切だと思われる。

本論は、共感覚という限られた領域に関するものであったが、今後はさらに比喩的表現や身体に関する表現などについても考えていきたい。

《注》

- 1) 形容詞＋名詞の組み合わせはそれぞれ、(1) i)「触覚＋聴覚」「触覚＋視覚」「触覚＋嗅覚」「触覚＋味覚」「味覚＋聴覚」「味覚＋視覚」「味覚＋嗅覚」「嗅覚＋味覚」(8項目) ii)「視覚＋嗅覚」「視覚＋味覚」「視覚＋触覚」「聴覚＋嗅覚」「聴覚＋味覚」「聴覚＋触覚」(6項目) (2)「聴覚＋聴覚」「視覚＋視覚」「味覚＋味覚」「嗅覚＋嗅覚」「触覚＋触覚」(5項目)である。
- 2) 同感覚様相因子項目のうち、「あまいにおい」「なまぐさい味」の二項目は、モダリティーの異なる形容詞と名詞の組み合わせられた表現である。しかし、これらは日常的にしばしば使用される表現であり、同感覚様相的な表現として感じられるものだと考え、そのまま第一因子内の項目として扱った。
- 3) 組み合わせはそれぞれ、(1) $Q2 \times Q3$, (2) $Q4 \times Q1$, (3) $Q2 \times Q4$, (4) $Q3 \times Q1$, (5) $Q4 \times Q3$, である。
- 4) 性の主効果がみられた部分があったが、紙面の都合上今回は割愛した。

《引用参考文献》

- 尼ヶ崎彬 1990 言葉と身体 勁草書房
有村達之・亀口憲治 1990 体験過程スケールによる家族面接の過程分析の試み 家族心理学研究 4-2 121-132
池見陽 1995 心のメッセージを聴く 講談社
市川浩 1975 精神としての身体 勁草書房
大石英史 1990 フォーカシングにおいて体験過程を推進するもの 心理臨床学研究 8-1 1号
木村敏 1988 あいだ 弘文堂
楠見孝 1988 共感覚に基づく形容詞表現の理解過程について—感覚形容詞の通様相的修飾—心理学研究 58-6, 373-380
中村明 1995 感覚表現辞典 東京堂出版社
中村雄二郎 1979 共通感覚論 岩波書店
原田眞理 1994 身体と心をつなげていく橋渡しの方法としての Focusing 心理臨床学研究 12-3
丸山圭三郎 1993 夢の象徴とコトバ 岩波講座 現代思想 3 無意識の発見
Merleau-Ponty, M. 1945 *Phenomenologie de la perception* Gallimard, Paris.
邦訳：竹内・小此木訳 知覚の現象学 みすず書房 1967

(博士後期課程2回生、臨床心理実践学講座)